
CCさくら 短編集

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こころへり 短編集

【Zマーク】

Z433560

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

こころへりの短編集です。時間軸はバラバラです…。

主に「さくら×小狼」（または小狼×さくら）です。
更新は、不定期です。

感想なども、お待ちしています！

手をつなぐ（前書き）

すんごく短いです。
小狼が香港から帰ってきて一週間ぐらい…かな?
もつとたつてるかな…?

手をつなげ

やくらと小狼は今一緒に下校中です。

そんな中、やくらは小狼にある「お願い」をしてみる事にしました。

その「お願い」は、今までしたかつたけど、出来なかつた「お願い」。

「しつ 小狼君！あのー！」

「ん？どうした？やくら」

やくらに呼ばれ、小狼は振り返つた。

すると、やくらがいつもと何かが違う事に気づいた。

「やくらへ、えりつこ…」

「あのー……あのね？」

小狼の言葉はやくらに妨げられる。

やくらの頬は、僅かに赤く染まつていた。

「あ、ああ？」

そのことに気づいた小狼は疑問符を浮かべた。

同時に少し首を傾げる。

やくらは少し俯いていた顔を上げた。

「…………手…繋がない？」

「……えー？」

やくらの突然の申し出に、小狼は一気に真っ赤になつた。

「あー やつ、やつぱり良いのーはつ恥ずかしいよねー」

やくらはそれを拒絶とつたらしく、笑いながら首をぶんぶんと振つた。

小狼はそれを見て、少しうつむいた。

心臓がバクバクいってこのを感じつつ、少し唇を噛む。

スッと短く息を吸う。

「…………なら……」

「え?」

ぼそり、と聞き取れないぐらい小さな声で、小狼が呟く。うつむいていたさくらは小狼の顔を見ようと顔を上げた。

「…………さくら……なら……良い」

小狼の顔は耳まで真っ赤だ。

これ以上無いんじゃないかとこいつくらに赤かった。

さくらは田を見開く。

「…………ほつ、…………ほんと…………! ?」

「…………あ、…………ああ…………ほら」

そう言つてそっぽを向きながら、ぶつきらりほつに手を出す小狼。さくらの顔がパアツと花が咲いたように明るい笑顔になる。

「ありがとう! 小狼君! 」

さくらは嬉しそうに手をとつた。

「あのね? 小狼君」

「ん?」

「これからは毎日手を繋げようね! 」

「! ! ! ! !

さくらは満面の笑顔で笑い、小狼は再び真っ赤になつた。

一緒に遊ぼうー

小狼が友枝町に返ってきて一ヶ月が過ぎたころ……。

さくらりと小狼と知世、千春や奈緒子や利佳、それに山崎のこつものメンバーは、みんなでお昼ご飯を食べていた。
場所は中庭だ。

「ねえねえ！ 知ってる？」「

千春が口を開いた。

「何を？」

さくらりは首をかしげる。

「知ってる？」ではよく分からない。

他のみんなも疑問符をだしている。

もちろん、山崎意外、だつたが。

「あのね！ 前にいった温水プール覚えてる？」「

「あ！ あの五年生の時の？」

さくらりはすぐ思い出したようだ。

「そう！」

千春がパツッと笑う。

「クリーミムソーダ美味しかったね

――

「うんうん！」

「すっごく面白かったし！」

「そこがどうかされましたの？」

他のメンバーもすぐに思い出したようで、女の子達は盛り上がる。

山崎は二口二口と見ていた

小狼は（ああ……あの……）と、お弁当を食べながら思い出している。

「あそこがね！ 来週リーコー・アルオープnするんだって！」

「そ、う、なん、だ、！」

「行つてみたいね！」

「リユーアルオープンっていうのはね

嘘はいいの！

いつもやりとげ

「新しくなつたつて事か？」

「ハ、アホだな、アホだな。」

「では、すつゞく素敵なんじつで！」

と、千春が嘘を言わせない。

それはいいものの事なので、みんな気にしない。

「ああ、どうした？」と、さすが千春ちゃん！ なれどるねー」と、レバーセのた

一
ヘ
ネ

一
すこ
しな
:

さくらも小狼も感心して興味を持つていた。

一
ね！李君も帰ってきていたし、みんなで行かない？

卷之六

賛序

第三回

四百九

「じゃあ来週の日曜日に行こ!」

卷之二

みんなは期待に、そしてわくわくに

胸を高鳴らせた

脳中（前書き）

これはまだ、小学生の頃のお話です。

なんだね？

とっても気持ち良い。

あったかい。

すく安心する。

ぱち。

さくらは田を覚ました。

「あれ？」

「田、覚めたか？」

耳の近くから声がする。

「りつ李君！？」

その正体が小狼だと分かり、さくらは驚きの声をあげた。

「どうした？」

「わたし…ほえ！？何で李君におんぶされてるのー？」

さくらはやつと気づいた。

そう。さくらは小狼におんぶされていた。

「お前、カードを替えて、そのままおれに倒れこんだんだ。

そのままにもしどけないし、ケルベロスが運ぶ訳にはいかないからな」

小狼が事の事情を説明をする。

理由が分かり、さくらはとりあえず納得した。

「そ…そつか…。ありがと。」

「べつ別に…！」

かあああつーと赤くなる小狼。

これで自覚が無いのだから、ある意味すこいだね。

「もう平氣だよ？下ろしてくれて…」

雪兎がそう言つと、

「ここまで来たんだからついでだ。送つてく。」

と小狼はそのまま歩き続ける。

「えつ！でも…悪いよ」

「だ…大丈夫だ／＼／＼」

小狼はそう言つてそつぽを向くと、雪兎を背負いなおした。
さくらは、小狼の優しさを感じた。

しかし、女の子としては、少々気になる事もあった。

「でもでも…重くない？」

「え？なんだつて？」

しかし小狼には聞こえ無かつたらしい。

「あつえつと…！何でもないのー！」

「？」

小狼は疑問符をだす。

「…ね、李君」

「なんだ／＼／＼」

「…ありがと…」

さくらは小狼の背中に顔をくつづけて目を閉じる。

すると小狼の鼓動が聞こえた

李君のおんぶかあ…。なんだか恥ずかしいナビ…、
すつじくあつたかくて…、
すつじく気持ち良くて…、
すくべ…安心する…。

雪兎さんやお兄ちゃんやお父さんとはなんか違う…。
きっと…李君だから…だね…。
わたし…李君と仲良くなれて、良かつた…。

小狼の心音が子守歌のよつで、さくらはそのまま眠つていた…。

背中（後書き）

うわ……//
なにこれ……！ハズ……！……！
なんか仲良すぎでしょかね？

「うたた寝には」用心！

ぽかぽか…。

「うとうと…。

暖かい日差しが窓から差し込む。

ゆっくり、ゆっくり、眠気を誘つ…。

小狼はやくらの部活が終わるのを待っていた。

なぜなら、今日は小狼の所属するサッカー部がお休みなのだ。

「…まあ…」

小狼はため息をついた。

しかし！

「でもここは教室は日が入ってきて暖かいし…。

（やくらの部活もみれるし…）たまには…いいかもな／＼／＼

小狼のいる1・3の教室からは、いつもは見られないやくらの部活姿が見られる。

それはそれで良いかもしれない。

しばりくはまおずえをついて見ていたのだが、やくらは小狼に気付くと、

笑顔で「小狼くーん！」と手を振つてくれるものだから…。

「な…つ…や…やくら…つ…／…／…（恥ずかしいだろ…）」

と真っ赤になつた。

そして、小狼も小さく手を振る。

その顔は無意識だが、優しく微笑んでいた。

その顔にさくらは、

「！！（はにゃんもお～ あんな顔… 反則だよう～～／＼／＼）

「

とはにゃん状態になつた（笑）

「？さくらの奴、どうしたんだ？」

しかし小狼は当然の如く、全く気付いてはいなかつた…。

はたから見ればただのバカップルだ。

この二人は時々こうなるのだ。

それからも小狼は見ていたのだが…、

ぽかぽか…。

「ひといと…。

「ん…ふああ…」

暖かな日差しが小狼の眠氣を誘つた。

「でも…さくらが来たら…」

小狼は最初こそ抵抗したが、眠氣には逆らえず…。

さくらは小狼を待たすまいと廊下を急いでいた。

そして1・3のドアを開けた。

「小狼君、ごめんね！待たせて…ほえ？」

さくらが教室に入ると小狼は腕を枕に眠つていた。

結構大きな声だったし、ドアもガラツと開けたのに起きないとほ…。

そういう良く眠っているのだろう。

さくらはそつと近づいた。

「…待たせちゃつたな…」「めんね？」

さくらはそつと誤る。

「でも、こんなによく眠つてることは、疲れてるんだよね…」

さくらはそう思ふと、胸が苦しくなつた。

「また、遅くまで仕事してたのかな…」

小狼は李家の次期当主。

遠く、日本にいる今だつて、その事に変わりは無い。だから、小狼は若くして、いろいろ書類があつたり、付き合いがあつたり…、仕事があるのだ。

「無理しちゃつて…」

さくらはつぶやいた。

「…わくら…」

その時、小狼が寝言を言つた。

「……小狼君…」

さくらはとても嬉しくなつた。

さつきまでのもやもやが、嘘みみたいに消えていく。

小狼の夢に自分が出ているのだ。

そして、夢の中でどんな事してるのか…と想像して、夢の中の自分に嫉妬してしまつた。

そんな自分に苦笑いした。

「…かわいい」

さくらはそう思つた。

いつもはキリッとしていて大人っぽい彼が、とても幼く、あどけない寝顔を見せている。

しかし、なんだかもやもやするものも生まれた。

「…」んなところで寝てたら…誰かに見られちゃうよ…

他の人には…見せたくない

さくらは小狼を起こす事にした…が、

「そつだ…！今なら…」

誰も見てないことを確認して、小狼に顔を近づける。

…そして

…ほっぺに、きす、してみた。

しかし、すぐに離れる。

「わつわたし何やつて…！／＼／＼／＼」

小狼はまだ眠っている。

安心したような残念なよくな…。

「せうだ！」

さくらはまた何か思いついた。

「えへへ…あまりこーゆ一事つてできないもんね」

そう言って小狼の頭を撫でた。

髪は思つていた以上に猫つ毛で、やわらかかった。

日が当たつて少し光つている。

「小狼君の髪…すごくやわらかい…！…えへへ…新発見／＼／＼／＼

さくらがそんな事をやつている間に小狼は覚醒へと向かっていた。

「（今…頭になにか…）」

小狼はそんな事を考えていた。

「ん…？」

「ほつほええ…！」

さくらはパツと手を引っ込めた。

「あれ…？さくら…？」

「う…うん…／＼」

小狼はハツとした。

完全に目が覚めたらしい。

「じつごめん！おれいつの間にか寝てて…！」

小狼は慌てて謝る。

「いい今来たばかりだから大丈夫だよ！／＼／＼／＼

じょとお知らせ

私の書く中学生小狼は李家の次期当主として、実にいろんな新しい技を習得しています。
その技を紹介します。

召喚・攻撃魔法

地龍将来
雪空将来
炎柱
水柱
緑木草
熱風
風雪
雷柱

呪縛でも使える

樹

呪縛・操り魔法

雷呪
炎呪
風陣
水陣
呪

<双方呪縛法>

炎雷呪
呪炎地
風水陣
風炎呪
風雷呪
炎水陣
水雷陣
地雪陣
風雪陣
雷雪呪
呪雷地
地風陣
風雪陣
熱雪呪
呪熱地
水雪陣
熱雪呪
呪熱地

他、これらをさらに応用した三方呪縛法なども。

特殊魔法

時	とき	時空	じくう	呪文が長い	じゅもんがながい	式神	しきがみ
陰	いん	陽	よう	眠	みん	空風	くうふう
翼炎	よくえん	結界	けっかい	特殊治癒	とくしゅちゆ	靈魂	れいこん
物質探知	ぶっしつたんち	治癒	ちゆ	淨化	じょうか	思念の剣	しねんのつるぎ
記憶操作	きおくそつさ	空間	くうくう	睡眠	みんみん	特殊魔法	とくしゅまほう

防御・治癒魔法

治療	ちゆ	結界	けっかい	特殊治療	とくしゅちゆ	淨化	じょうか
----	----	----	------	------	--------	----	------

今の小狼の魔力は以前と比べて数段高く、さくらと同様に、少し劣るくらいです。

他にも技のアイデアあつたら下さい。

この子李家次期当主なのでいくらでも作れちゃうんですよ^_^

壇を置かせて（前書き）

久しぶりの投稿です。

甘い……のか？

いや、甘くはない…と思います。

まだ遠距離恋愛の時の話です。

声を聞かせて

早く…。

早く7時にならないかな？

…早く、早く…。

胸がドキドキして、そわそわして、落ち着かない。
落ち着けないよ。

毎週土曜日の夜7時は、とっても特別で大切なの。
だって、小狼君とお話できるから。

香港にいる小狼君と電話できる。
小狼君の、声が聞ける。

…まだかな、まだかな。

もう少し。あと少し。

もう少しあと1分。

早くお話をしたい。

声が聞きたいよ、小狼君。

力チ コチ 力チ コチ

…携帯電話はずっと無口。

ピクリとも動かない。

どうしたの？もひつ時だよ？

一つせねばタリに鳴ってくさるの。お話でやるの。

今日は…。無口。

…小狼君…。

…むづ、8時だよ…。

小狼君、どうしたの？

何かあったの？

まさか、風邪！？

事故とかじやないよね！？

誘拐とか…！

…もしかして、電話するの、イヤになしきつた…？

…9時…、なつちやつた…。

もつわたしからかけひやおつかな？迷惑かな…。

……小狼君…………！

泣かないって、決めたのに。

小狼君が帰つて来てくれるまで、
絶対、泣かないって。

なのに

たつた、たつたこれだけで、目頭が熱くなつた。
わたし……もう……。

！！

来た！！！

（　）

バツとすぐに携帯を手に取る。

携帯から、わたしの大好きな声が聞こえた。

「小狼君っ！」

『うわっ……すいこな。コール一回』

どりじょひ。

涙が出てくる。

『ごめん…遅くなつて…し、仕事が色々といたゞたしてしまつて
……

今まで母上と話しあんでいたんだ…！…………本当にごめん…！』

電話の向こうで頭を下げているのが簡単に想像できて、少し笑つた。
やつぱり、小狼君は優しいね。

「うん、いいのー。かけてきてくれただけで嬉しそー。」

『や、そつか。……その、元氣か?』

「うん、元氣だよ。お仕事忙しいのー、かけてきてくれてありが
とうー。」

『えつ?あ、いや、別に。た、ただ。お前の…』

お前の?

電話の向こうで慌てる声が聞こえる。

「あー」とか「うー」とか「えつと…」とか。

『だ、だから…、その…、お、お前の…。い、い、…瓶が…
だな…。』

……その…、えと…、え、えつて、も…、置か、た、く
て…』

あ……！

小狼君も……えつ思つてくれてたんだ！

『迷惑かと…、思つたんだけど…』

「そんな事無いー！そんな事無いよつ！わたしも…わたしも
声！

小狼君の声が、すつ「えつ」へ聞きたかったーお話をしたかった
のー。』

『えつ…あ…、そ、そつ、か…。うん…、その…、えつと…。

おれ、頑張る。だから…、だから…。

お前に…。……さくらり、待つていて欲しい…。』

「…うん…えくら、頑張つて待つてるよ！小狼君が帰つて来てくれ
るの、ずっと、ずっと待つてる…。」

『あつがとう…。わくら』

安心したような声が聞こえた。

「あのね？小狼君」

『何だ？』

「わたしね……、小狼君が、大好きだよ」

『……なつ…………！？ つ…………お、おれも…………だ
大…………好き、だ…………』

ふふつ。

きつと、小狼君真っ赤だね。

小狼君、照れ屋さんだから。

でも、そんなところも大好きだよ。

「…………じゃ…………またね？」

『…………ああ…………またな』

「苺鈴ちゃんにも、よろしくね？』

『ああ。そっちも、大道寺とか、山崎とかによろしくな

「うん。…………おやすみなさい』

『…………おやすみ』

『…………ピッ・・・・・・』

「……小狼君……」

本当は、もっとお話をしたいよ。

「……うん！パワー充電…………大丈夫。
待つてるよ、小狼君。…………わたしは、元気だよー」

「…………わたしは、元気だよー」

二人が再会するまで、後もう少し…。

あの、春の風吹く、桜の下で…。

小狼の悩み事

「う~ん…」

小狼は悩んでいた。
とてもなく悩んでいた。

(さくらの誕生日プレゼント…何が良いんだろう?)

そう、一週間後は小狼の一一番好きな人である、木之本さくらの14歳の誕生日。

実は小狼、1ヶ月前から考えているのだが思いつかない。
知世に相談しても雪兎に相談しても苺鈴に相談しても、返ってくる答えは

「小狼が渡すものなら何でも喜ぶ」というものだった。
山崎に相談すると嘘を言ってくる。(そして騙された)去年談
桃矢やケルベロスなどには絶対に相談したくない…。
したとして、まともな答えは期待出来ないし、ケンカになるのがオチだらう。

しかし……、何でも良い、と言われても小狼は困ってしまう。

小狼からしてみれば、やはり一番喜ぶものをあげたい。

それで悩んでしまうのだ。

いや、知世からはもう一つアドバイスはあった…が、

(でつ出来る訳ない…………それに…やつぱり形に残つた方が良いし…)

ぶんぶんと小狼は首を振った。

「あ…。」

小狼はふと、あるところを思い出した。

「…あそこには行つてないな…行つてみるか」

小狼が向かつた先は…、

カラソカラソ

「あら、李君。いらっしゃい~」

「ー、こんにちわ

「ゆづくつしていってね?」

「は…はい」

「こはーツイン・ベル~ どうしてここに来なかつたのか…」

小狼は自分を恨んだ。

小狼はお店の品をじいい~!と見て考える。

ちなみに女の子たちが小狼を見ては頬を染めたりしているのだが、
小狼は全く気づいていない。

「あ…。」

一品、小狼が目をとめた物があった。

それはさくらも気に入ると思われる物。

「……よ」

小狼はそれをレジに持つていった。

「あの……」れ下さい！」

さて、小狼が選んだ物とは？

小狼の悩み事（後書き）

あ…。

本当は25日で誕生日だったのに…。
とりあえず、やくらの誕生日の余響（？）小説です！

わべりのさせなー田

【三田三十一田】

「じゃあ明日、九時に迎えに来るから」

「うん、ありがとー！また明日ね？」

「ああ…。また明日」

わべりは小狼に送つてもらい、家の前で明日の約束の確認をした。
やじて帰つていく小狼の背を見つめていた。

『わべりの嘘』

がわりやつ

「よひ、せひ、せひーおひ、わべりーお帰つひーせひー。」

ケロリやんばゲームをしながら言つた。

…が、

「せひー」と

わべりは小狼ついてベシトドーリハルがつ始めた。

ただいま、とこひ言葉など頭からすりすりと抜けていくよひだ。

「なんやわべり。えなこしたんや？」

そんなさくらに気づいたケロちゃんは、ゲームを中断してさくらの元へと飛んだ。

「明日ねっ！小狼君がわたしの事、お祝いしてくれるんだって！樂しみだよう～～～」

さくらは頬を赤く染めて、更に早く「口」口し始める。その様子から、とてもウキウキしている事が伺えた。

「恋する女の子はホンマよう分からんで……」

ケロちゃんはあ…と呆れたため息をはいた。

「小狼君」。早く明日にならないかなあ……／＼／＼／＼

【四月一日】

ピンポーン…、とチャイムが鳴り響く。
すぐさまやく反応した。

「あ！小狼君だ！」

階段を駆け下りるすべり。

「ホンマ時間ぴつたしな…」

ケロちゃんは小狼の生真面目さで、呆れたように呟いた。

「小狼ぐ…お兄ちゃん!」

さくらが玄関を見ると、睨み合つ（といみあつ）（といみあつ）桃矢が一方的に睨んでる（のぞむ）小狼と桃矢がいたのだつた。

「あつ!」

今的小狼の目には、さくらは救いの女神に映つただろう。

「（じめんね？）小狼君…。お兄ちゃん！ 小狼君睨んじゃだめ！」

さくらは軽く兄を睨んだ。

「…ふん。さくら、五時には帰つて来いよ？ つちでだつてやるんだからな」

「五時
！！？？？もう少しいい感じよー！？」

さくらはあまりに門限が早いため抗議したが、

「だめだ」

桃矢はバツサリと切り捨てた。

「なによお兄ちゃんのケチ！ 行こ！ 小狼君！」

「え？ あ… ああ」

「おこ」

出て行こうとするセイヘイと小狼を呼び止める桃矢。

「なんだ」

「さくらになにかしたら……」

「（えへー）」

小狼は悪感を感じた。

「こつ行こつー！」

「へつんー！」

やつとやつ達は小狼の家へ向かった。

『小狼の家』

小狼の家に付き、やくらと小狼のプチパーティーが始まった。やはり派手に飾り付けてあるところは無いが、テーブルにはお手製料理が並んでいた。

「あ、あの」

「なに？ 小狼君」

セイヘイは小狼に呼ばれ、小首をかしげながら振り向いた。

「……その……お誕生日……おめでとう。…………やべへ」

小狼はふわりと笑つて言った。

「……ありがとう！小狼君！」

さくらは花が咲いたような笑顔になつた。

「あ、……」

小狼はピンクの包みを出した。

「わあ……！……ありがとう……！」

さくらは大事そうに受け取つてプレゼントを抱きしめた。

「開けてもいい？」

「ああ」

かさかさ……。

その包みは意外にも少し重かつた。
ドキドキしながら開けていく。

「…………オルゴール…………素敵だね…………」

さくらはうつとりとそれに見入つた。

それは撫子の花に藤の花、桃の花、そして桜の花が彫られているオルゴール。

そして、あともう一つ

「このオルゴール、好きな模様を彫ってくれるやつなんだ。」

「そりなんだあ……撫子の花はお母さん。藤の花はお父さん。桃の

花はお兄ちゃん。桜の花は私。…そして牡丹は小狼君だね…」

「あ…ああ…」

小狼は顔を赤くしてそっぽを向いた。

オルゴールにはもう一つ。

牡丹の花

「ありがとう……わたし…これ絶対絶対大事にする……ひとつでも嬉しい…！…聞いてみよっか！」

「ああ。そうだな」

ねじを回してふたを開ける。
すると、聞こえてくる優しいメロディー…。

「…本当に素敵なお誕生日プレゼントだよ……」

「あ、そうだ…

（大道寺に言われたこと…やればもつと喜んでくれるのか…？なんかすごい恥ずかしいけど…）
（あつ、あの……）

「小狼君？」

小狼はさくらを見つめた。

とても優しく、まっすぐな瞳で。
それでもやはり少し頬を染めて。

するとさくらはその瞳がきれいで、恥ずかしくて、でも嬉しい。
そんな気持ちになる。

無論、小狼は気づいてないが…。

「…さくら」

名前を呼ぶ。

「な……に?」

さくらが答えると小狼は、

「……その……だから……。……おれは……さくらが……す……好きだ!」

好きだ

「嬉しい……」

さくらは嬉しさのあまりか感動か、ポロリと涙を流して笑った。
小狼は真っ赤だったが、その笑顔に更に赤くなつた。

「わたしも……わたしも、小狼君が大好き……」

二人はふわっと、はにかみながらお互に笑つた。

「さ、さあ。ケーキ食べるか

「うん!! 小狼君!!」

二人とも顔も赤くて恥ずかしそうにしていたが、とてもとても幸せな誕生日になつた。

「小狼君のお誕生日には、わたしから『好き』って言ひなー。」
「ええっ！？／／／／」

せべりの幸せな一日（後書き）

せべりの誕生日記念小説です！

うつわあ～、はずかしい！

これどこのバカップルですか！？？？

せべり！誕生日おめでとう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4356o/>

CCさくら 短編集

2011年5月10日21時44分発行